ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ある夏の昼下がり。この日は全国的に暑く、空は雲一つない青空が広がっていた。さんさんと照りつける太陽は、その力を遺憾無く発揮し、今年の最高気温の記録を今も時々刻々と塗り替えている。

　ここは日本の首都から少し離れたところにある学園都市、『』。

　一之上市は、『市』という割には、他の都市と比べれば、どちらかというと田舎だ。昔ながらの住宅が立ち並び、今や珍しい駄菓子屋なんてものも存在する。

　暑い故か、外に出ている人は少ない。それでも、全くいないわけではなく、そういう人達は例外なく、皆涼しげな格好をして、時折、水筒やペットボトルの水やお茶を飲んだり、ハンカチやタオルで汗を拭いている。庭を見れば、ポケモンと一緒に水浴びを楽しんでいる人もいて、それは実に平和そうな風景だ。

　平和そうな、と言ったのは、よく見れば異質な男が、ここにいるからだ。

　男は『見かけ』は背は高く、大人びている。顔は、純日本人とは言い難いような感じだ。しかし、この暑い中、何と彼は厚手のローブを着ている。それでも、彼は汗一つかいた様子がなく、そんな顔もしていない。涼しげに、悠々とアスファルトを踏んでいた。そしてそれは、彼の隣に立つ紺色の陸ザメ、ガブリアスも同じだ。

　男の左目の下には、ちょっと目立つ傷跡が一本、真横に痛々しく伸びていて、それを隠すように赤黒い髪の毛で覆われていた。だが、風で髪の毛が揺れる度に、傷跡が露わになり、深緑色の目がチラチラと光る。服装といい、日本人っぽくない見た目といい、ここらへんの人達とは全く違う。ガブリアスなど、ここらで見かけるポケモンではない。

　だが、道を行き交う人々は、彼に気がついた様子はない。明らかに目立つのに、まるで彼がそこにいないかのように振舞っていた。

　彼は黙々と歩みを進める。その先には、大きな山がえていた。今、彼が歩いているこの道は、その山のまで続いており、途中に分かれ道もない。なので、彼がその山を登ろうとしているのは間違いないだろう。それにしては、随分と軽装備だが。

　山麓に着くと、ずっと前だけ見ていたその目が、初めて上に向けられる。その目には感情はない。ただ山の頂をジッと見つめていた。そして、その目はゆっくりと、立てかけられてる、既にボロボロの木板に向けられる。何か書かれているが、最早、字が読めるような状態ではない。それでも、彼はその山に足を踏み入れた。

　時が過ぎても、彼は未だに、その山から下りてこない。